

国立国語研究所学術情報リポジトリ

「つまり」による換言が促す理解の範囲について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 芽衣子, Sakurai, Meiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003750

「つまり」による換言が促す理解の範囲について

櫻井芽衣子 (日本工業大学)

The Scope of Influence that Promotes Understanding by Paraphrasing

“*Tsumari*”

Meiko Sakurai (Nippon Institute of Technology)

要旨

日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 7』によると、「つまり」は先行部を具体的に説明したり要点をまとめたりするものである。文脈を考慮に入れ、「つまり」による換言の様相を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で見ると、後続部は必ずしも先行部を分かりやすく言い換えるとは限らないが、先行部に情報を追加し、先行部だけでなく、まとまりのある文章として理解を深める場合があることを指摘する。先行部の理解を促す換言と、文章の理解を促す換言、これらの換言は、石黒圭 (2001) 「換言を表す接続語について——『すなわち』『つまり』『要するに』を中心に——」『日本語教育 110 号』で指摘される換言の二つの目的に沿うものであることも確認する。

1. はじめに

換言の接続表現「つまり」は、表現を平易にする、具体化・抽象化する、観点を変える等、先行部を様々な形で言い換えて示すもので、「つまり」によって提示された後続部は、聞き手の理解を促すような先行部の解釈である (日本語記述文法研究会 2009)。換言された結果、先行部についての理解は深められる。

- (1) 実家では甲斐犬、つまり、オオカミのような毛色と立ち耳が特徴的である中型の日本犬を飼っている。

換言された後続部によって先行部「甲斐犬」のイメージが明確になり、理解しやすくなる。先行部「甲斐犬」の知識が不十分な読み手にとって、理解を促す換言であるといえる。逆に、「甲斐犬」に詳しい読み手にとっては、なくてはならない換言ではない。

その一方で、同じ「つまり」を使った換言であっても、「つまり」を含む一文だけでは理解が促されるとはいえない換言もある。

- (2) 隣家から甲斐犬、つまり伝統的に現在の山梨県の辺りで飼育されていた猟犬が柵を越えて家の庭に侵入し、柴犬のポチと仲良くじゃれていた。

先行部「甲斐犬」の換言として誤っているわけではないが、読み手によっては後続部を不要な情報であると感じ、その結果、却って理解を妨げるおそれがある。しかし (3) のような後続文脈がある場合、換言が重要な意味を持つ。

- (3) 隣家から甲斐犬、つまり伝統的に現在の山梨県の辺りで飼育されていた猟犬が柵を越えて家の庭に侵入し、ポチと仲良くじゃれていた。南アルプスの岩場を駆け巡って狩りをしていたため遺伝的に飛節が発達しており、跳躍を得意とする甲斐犬にとって、庭を区切る程度の柵を飛び越えることなど訳もない。何度も侵入を繰り返したことで、ポチもすっかり慣れている。

「山梨県」「猟犬」という後続部の記述が、後続文脈「南アルプスの岩場を駆け巡って

狩りをしていた」「跳躍を得意とする」へと繋がり、何度も柵を飛び越えているため隣家の犬と仲が良いという文章全体が理解しやすくなる。先行部「甲斐犬」に詳しい読み手であっても、換言されていた方が内容を読み取りやすくなる。

(1) の換言は先行部の理解を促すものであるといえ、(2) の換言は (3) との比較において明らかであるように、文章レベルでの理解を促すためのものであるといえる。(2) について、(1) と同じように換言を含む文だけを取り出して分析しては掘り切れないことがある。一見意味のないような換言であっても後続文脈を補うと内容理解が進むことから、換言を分析する際、文脈を考慮することは必要であると考えられる。

本発表では文脈も考慮しながら換言を分析し、換言は、読み手にとって必ずしも理解しやすいように先行部を言い換えるわけではないが、先行部に関する何らかの情報を追加するものであること、後続部が文脈の内容に裏付けられているか否かという観点から、三つの換言があることを指摘する。また、それぞれの換言によって、理解を促す範囲が異なることにも触れる。

2. 考察対象

考察の対象としたのは、接続表現「つまり」の前後に、「時」「人」あるいは、そのいずれかを主要部とする名詞句が来るものである。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ) からコーパス検索アプリケーション『中納言』を用いて収集した。「時」「人」に限定したのは、多様な先行部・後続部ではなく、類似の性質を持つものを比較するためである。条件を揃えるためには同一の固有名詞や一般名詞を対象とすべきだが、用例数が少なかったため、国立国語研究所(2006)を参考に高頻度で出現するものを対象とした。

中納言の長単位検索を用い、名詞あるいは名詞句同士の換言を見るために、「つまり」から3語以内に「時」もしくは「人」を含むという前方共起条件、あるいは、10語以内に「時」もしくは「人」を含むという後方共起条件を設定して検索した。抽出されたもののうち、名詞(句)同士の換言であることが確認できるものを選定している。

3. 換言の様相

「つまり」の前後で言い換えている名詞(句)のうち、「つまり」の前に提示されているものを先行部、後のものを後続部と呼ぶ。また、「つまり」を含む文より前の文脈は先行文脈、「つまり」を含む文に続く文脈を後続文脈とする。

3.1 先行部の理解を促す換言

まずは、換言によって先行部の理解が深められる例を見る。

(4) は、換言を含む下線部のうち二か所が省略されているが、それぞれ「シェイクスピア」「千六百(九十四年)」であろう。シェイクスピアが生まれて30年経った時が西暦何年であったか、換言によって示されている。

(4) おれが教わった英文学の教授なんてものはさ、いちいちこまかいこと説明するのが面倒臭いからって、省略する部分を『>』『>』でやってしまう。ちょっとやってみましょうか。『シェイクスピアの大喜劇時代といわれる>は、だいたい>の三十歳の時つまり>>九十四年から六年ぐらいで、機智の喜劇、たくらみの>>、ロマンチック>>などを>したが、この>の>>はやはり『真夏の夜の>』で、特に三つの>>の>>人物に>しているフォルスタッフなどは>>>>上類の

ない、性的性格である』あははははははは。笑っちゃうよね。でもこういう教授は本当にいたのです。今もやってるかもしれません。

BCCWJ サンプル ID: OB3X_00110 筒井康隆(著)『文学部唯野教授』

二重鍵括弧で括られており、シェイクスピアの話題はここで終了している。換言を含む一文だけを取り出しても理解でき、この限られた範囲においては前後の文脈と意味的な連続性を持つものとはいえない。西暦を述べている後続部は、先行部についての知識を増やし、先行部の理解を促す換言であると判断できる。

(5) もまた、先行部の理解を促す換言であると考えられる。二か所の下線部において、それぞれ「官軍」「賊軍」の辞書的な説明がなされ、その結果、先行部の知識が十分でない読み手は新たな情報を得ることとなる。この換言は、文脈から切り離しても成立する。

(5) けれど、宗教が政治と結びつくことは、いちばん怖い。国家権力によって、人々の心への強制が始まり、内心の自由を奪う。国家の意図する方向に、国民を引っ張っていくことができる。それが戦前の国家神道。侵略戦争に国民を駆り立てた恐ろしいからくりであった。その中心が、靖国神社である。／明治維新以来、官軍つまり天皇のために死んだ人のみを、「神」として祀り、賊軍つまり天皇に反抗して死んだ人は排除する。

BCCWJ サンプル ID: PB53_00218 平山知子(著)『家裁弁護士 ミモザの花言葉のように』

これらの換言は、先行部に対して後続部が情報を追加し、先行部の理解を促している。換言を含む文と前後の文脈との意味的な結びつきが重視されなければ、追加された情報は、先行部の分かりやすくするものにすぎない。

3.2 先行文脈に支えられる換言

続いて、後続部が先行文脈の内容に支えられ、先行文脈の内容を確認することとなる換言を見る。これは、必ずしも先行部を分かりやすく言い換えるとは限らない。しかし、後続部の成立が先行文脈に依っており、先行文脈があることで自然な換言となっている。後続部が先行文脈の内容を踏まえているため先行文脈の内容を確認することにもなり、先行文脈からのまとまりのある文章として理解しやすくなる。

(6) 物件価格の八十%までしか融資を受けられない、と聞いてがっかりしている人もいるだろうけど、チョット待って。残りの二十%は「頭金」で払えばいいのだ。じつはこの頭金を入れるということが、買う人、つまりローンを返済する人にとっては、たいへんラクになることなのだ。

BCCWJ サンプル ID: PB33_00046 らくらく持ち家委員会(著)『ゼットイ失敗しないマイホーム購入大満足ガイドブック』

先行部の「買う人」と後続部の「ローンを返済する人」は、先行文脈が無ければ関連付けることは難しい。先行文脈では、「物件」「融資を受けられない」「頭金」等の記述から、高額商品を現金一括払い以外の方法で購入する場合のことを説明していることは明らかである。先行文脈においては、購入時にローンが前提となっており、そのため、「買う人」が「ローンを返済する人」へと換言される。またこの後続部は、先行文脈の内容を確認することとなり、先行文脈から続く内容をまとまりのあるものとして理解しやすくなる。

(7) つまり、人間の意識を超えたところに、真実の世界がある。(略) 哲学はすべて汝自身を知るところから始まりました。ところがそこから先が東洋思想のい

いところで、「自己をならふ」ということは、「自己をわするるなり」。自分をならうというのはふつう、自分を対象化して、ああでもない、こうでもない吟味を加えること、あるいは自分の真理はどうだとかいって自分を分析することです。ところが、「自己をならふ」というのはそういうことではなく、「自己をわするるなり」です。(略) 自分をとことん考えていくためには、そんなに自分を大事にしてはだめだ。思い切って自分自身を、全部捨ててしまいなさいというのです。自分を大事に考えるという我執、執着を捨ててしまえ。自分を忘れた時つまり、自意識というものがなくなってしまった時に、「万法に証せらるるなり」です。万法というのはすべてのルール、秩序、すなわち真実ということです。宇宙の真実。自分というものを捨て去った時に、宇宙の真実と一致することになります。

BCCWJ サンプル ID: LBp1_00010 栗田勇(著)『道元いまを生きる極意』

(7) の先行文脈では、自分を考えるためには「自分自身」や「自分を大事に考えるという我執」を捨てることが求められていると説明されている。ここでいう「自分自身」「自分」とは、確かに私が存在していると感じる自己意識や自我であり、それを捨てることにより、自分の本質が明らかになる、ということである。この先行文脈の記述を踏まえて、「万法に証せらるる」のは「自意識というものがなくなってしまった時」と換言されていると考えられる。先行文脈に基づき後続部へと換言されることにより、長い先行文脈との関連が明らかになり、まとまりのある文連続として理解しやすくなる。

3.3 後続文脈に支えられる換言

最後に、後続文脈に支えられており、それ故に後続文脈も含むまとまりを理解しやすくなる換言を見る。

(8) 本当に強い人とはどんな人だろうか？誰がきても負けない人？ボクシング世界チャンピオン？K1世界チャンピオン？否。強い人とは負けない人。つまり戦わない人である。人はそれぞれなのだ、同じ土俵に上がる必要はない。つまり、妻に小言を言われたら、反論せずに寝たフリや子供をだしにその場から去る。恋人と喧嘩をする人は恋人があなたに嫌な事をした時に向き合うからだ。遅刻してきたら、「遅刻ムカつくんですけど」と言い、恋人が言い分けしてきたら、無言でその場を去ろう。1番いけないのは水掛け論。柳のようにしなると吉。

BCCWJ サンプル ID: OY01_01398 「Yahoo! ブログ」

(9) 六十歳以上のシルバーを雇用するときは、とくにこの労働時間の管理は重要です。私の存じ上げている企業の中で会計検査院から年金の不正受給だと指摘を受けたところがありました。その検査の仕方はこうでした。特定の人物の名前を数人あげて、その人間の「賃金台帳とタイムカードもしくは出勤簿を持ってこい」というのです。会計検査院は国税庁と社会保険庁とチームを組んで年金の不正受給を調べています。その調査は不正受給の可能性のある人(つまり収入の多い人)を事前にリストアップしていますから、かなりの中するようです。六十歳以上六十五歳未満の人は、厚生年金の在職老齢年金を受けることができますが、その年金は賃金の多寡に応じて減額されることになっています。しかし、勤務時間と勤務日数が少なく社会保険に加入していない場合は、その減額がありません。つまり年金を全額受給しながら賃金ももらえるわけです。問題は社会保険に該当するフルタイムで働いておりながら社会保険に加入せず、年金を満額受給しているケースです。こ

れは年金の不正受給になります。

BCCWJ サンプル ID: LB13_00069 北見昌朗(著)『パートさんに正社員以上の仕事をしてもらう本 北見式実践マニュアル』

(8) では、「負けない人」であるためにはそもそも「戦わない人」であればよいということとこのように換言されていると考えられ、これ以降の後続文脈において「戦わない人」の具体的な行為が列挙されている。もし換言されていなければ、先行部「負けない人」と後続文脈との関係が掴みにくくなり、読み手にとって疑問を抱かせる文章となる。一方、後続部「戦わない人」と後続文脈の関係は明確であり、後続文脈があるからこそ、後続部のように換言できるといえる。文章の内容もまとまりのあるものとして理解しやすくなっている。

(9) では、先行部「不正受給の可能性のある人」が、関連を掴みにくい「収入の多い人」に換言されている。「不正受給の可能性のある人」と「収入の多い人」をと直接関連付けることは難しいが、この関係は後続文脈で説明されている。在職老齢年金の受給やその金額の条件には「賃金の多寡」があり、不正受給が起こりうるのは、加入すべき社会保険に不正に入らない場合である。そして、社会保険は、「フルタイム」ならば加入しなくてはならない。この後続文脈に支えられて、先行部「不正受給の可能性のある人」は、「フルタイム」で働く「収入の多い人」へと換言されると考えられる。単なる先行部の理解に留まらず、文章レベルでの深い理解をもたらすこととなる。

なお、(7) の後続部は後続文脈の内容に支えられたものでもある。「自意識というものがなくなってしまった」は、後続文脈「自分というものを全て捨て去った」という記述があったからこそ成り立つといえる。

4. 文脈も含む検討の必要性

文脈から独立しており先行部を分かりやすくする換言、後続部が先行文脈あるいは後続文脈の内容に裏付けられ、連続するまとまりのある文章としての理解を促す換言を見てきた。

以上の換言は、「つまり」の前後だけを抜き出した場合、先行部の理解が深まるとは言い難いものがある。以下に、下線部のみを挙げる。

- (4') 　の三十歳の時つまり　の九十四年
- (5') 　官軍つまり天皇のために死んだ人／賊軍つまり天皇に犯行して死んだ人
- (6') 　買う人、つまりローンを返済する人
- (7') 　自分を忘れた時つまり、自意識というものがなくなってしまった時
- (8') 　負けない人。つまり戦わない人
- (9') 　不正受給の可能性のある人 (つまり収入の多い人)

(4') (5') と比べて (6') ~ (8') は、「つまり」の先行部と後続部との関係が明確とはいえず、却って疑問を抱かせるおそれのある換言となっている。にもかかわらず、(6) ~ (8) のように文章レベルでの理解を促している点は、文脈も考慮した場合、換言が単なる先行部の言い換え以上の働きを負っていると見てよいだろう。

先行部のみの理解を促す換言と、文章レベルでの理解を促す換言とでは、性質が異なるように見えるが、換言の働きそのものは先行部に関する情報の追加であることは共通している。換言した後続部が、文脈を踏まえたものであるか否かという点において異なっており、それ故、結果的に文章がより分かりやすいものとなると考えられる。

この把握の仕方は、言い換える理由には理解上の要請と文脈上の要請があるという石黒

圭（2001）の指摘に沿う。理解上の要請とは、一つの表現内容について異なる二つの表現を提示することで受け手の理解を促すために換言が成り立つというものであり、文脈上の要請とは、文章の流れを円滑にするために換言が必要とされるということである（石黒 2001）。先行部の理解を促す（4）（5）の換言は理解上の要請によるもので、文脈上の要請による換言が（6）～（9）である。（6）（7）は、先行文脈との流れを円滑にするための換言であり、（8）（9）は後続文脈との流れを円滑にするための換言である。

接続表現の先行部と後続部との関係だけに注目するのではなく、前後の文脈も考慮に入れて考察する必要がある。

5. まとめと今後の課題

換言そのものは情報の追加という働きを担っており、換言の前後で述べられている内容が後続部を支えるか否かという観点から、三つの換言を指摘できることを述べた。特に、文脈から切り離しても先行部と後続部との関係が明確である換言と、そうでない換言とでは、性質が異なるように見えるが、分析の際に文脈を考慮することで、より一般化して換言の働きを捉えることが可能になる。このことから、文脈という観点は文法研究に欠くことはできないといえる。

ここで、換言が文脈から独立していた（4）に注目したい。換言そのものの操作ではないため、文脈から切り離しても先行部を分かりやすくするものであることに変わりはないが、文脈によっては、後続文脈まで意味的な連続性のあるまとまりとして捉えることとなり、文章の理解を促すと考えられる。

（4）シェイクスピアの大喜劇時代といわれるは、だいたいの三十歳の時つまり
りは九十四年から六年ぐらいで、機智の喜劇、たくらみの、ロマンチック
などをしたが、このはやはり九十五～九十六年頃に執筆された『真夏の夜の』で、その頃世界的には、……

破線部分が、書き加えられた後続文脈である。シェイクスピアの年齢が西暦に換言されることにより作品の執筆年も自然な表現となり、「世界的には」に続くと考えられる出来事をイメージしやすくなる。（4）のように換言されていれば、文章がまとまりのあるものとして理解しやすくなるだろう。辞書的記述に基づく換言であり、後続部が文脈を前提としているものでなかったとしても、文脈との意味的な連続性が認められることもあるといえる。

必ずしも意識されるとは限らないが、読み手は換言を手掛かりに読解する。書き手の意図は、記述から推測することしかできず、換言の後続部に書き手の体験に基づく知識が反映されている可能性もある。推測にすぎない書き手の意図と、読み手の思考の展開は、換言を分析する上で区別しなくてはならない。文脈の他、必要な観点として今後の検討に生かす必要があると考える。

参考文献

- 石黒圭（2001）「換言を表す接続語について——『すなわち』『つまり』『要するに』を中心に——」『日本語教育 110号』pp.32-41
 国立国語研究所（2006）「現代雑誌 200 万字言語調査語彙表 公開版 ver.1.0」
 日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 7』くろしお出版

関連 URL

コーパス検索アプリケーション『中納言』<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>